

学会ハイライト

第46回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎 学会総会学術大会を終えて

平成28年11月5日(土), 6日(日), 京王プラザホテル

川島 眞, 石黒 直子, 常深祐一郎, 福屋泰子, 竹中 祐子

東京女子医科大学皮膚科学教室

はじめに

平成28年11月5, 6日に, 東京都新宿区の京王プラザホテルにて, 第46回日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会総会学術大会を開催させていただきました。幸いなことに好天に恵まれ, 全国から1,000人を超える, 過去最高の参加者にお集まりいただきました。ここに, 無事盛会裡に終了できたことをご報告いたしますとともに, ご講演, ご司会をお務めいただいた先生方, さまざまなア

ドバイスをいただいた本学会の役員の皆様, ご支援いただいた東京女子医科大学皮膚科専門会の皆様に厚く御礼を申し上げます(図1)。

本学会のテーマは, 「皮膚アレルギーが見えてきた」としましたが, 近年の免疫・アレルギー学の基礎研究の進展, そして種々の疾患に対する分子標的薬の開発から, 皮膚科領域のさまざまな疾患においても, その発症病理に関与する因子がピンポイントに特定されるようになってきました。皮膚アレルギーのメカニズムが正に可視化されて



図1 学会事務局スタッフ。

きた感があります。その点に関する特別講演、招待講演に内外から素晴らしい演者にお越しいただきました。もう1つの「見える皮膚アレルギー」がパッチテストです。皮膚科医にとっては基本検査手技と思われそうですが、最近やや敬遠されています。本学会において、もう一度パッチテストにハイライトを当てる必要があると考え、「接触皮膚炎とパッチテストのすべて」と題して、パッチテストのハンズオンセミナーを中心とした特別企画も設けました。

以下に、学術大会の内容についてご報告させていただきます。

特別講演, 招待講演

特別講演にはWPI大阪大学免疫学フロンティア研究センターの坂口志文先生をお招きし、「制御性T細胞による免疫応答制御」のお話をいただきました(図2)。制御性T細胞を標的として抗原特異的に増殖させることで移植臓器に対する免疫寛容を誘導させ、逆に制御性T細胞を量的、機能的に減弱させることにより腫瘍免疫、感染免疫を亢進させるなど、新たな治療法への期待を抱かせる講演でした。実は、坂口先生は昨年のノーベル医学賞の最有力候補とされており、本学会の直前に発表される予定でしたので、受賞が決まるとお忙しくてご講演いただけないのではと思い、ビデオレターでも撮影させていただこうかと考えていたほどです。正直ほっとしたところもありましたが、来年こそは受賞されるであろうと確信するご講演でした。

国内からの招待講演者の1人として、東京大学代謝病態学糖尿病・代謝内科の門脇孝先生をお招きし、脂肪細胞から分泌されるアディポネクチンの低下がインスリン抵抗性をもたらし糖尿病発症に関与するのみならず、 $\gamma\delta$ -T細胞からのIL-17産生にも関与し、乾癬の増悪にも関連することを示され、さらにはアディポネクチン受容体作動薬による長寿シグナル活性化の可能性など夢のある話を聞かせていただきました。

もう1人の国内招待講演者としての東京女子医



図2 特別講演 坂口志文先生による「制御性T細胞による免疫応答制御」のご講演。

科大学薬理学の丸義朗先生は、癌細胞の原発巣での炎症の持続が遠隔臓器での土壌を形成し、そこに癌細胞が転移する、すなわち、原発巣が遠隔操作で転移先の生理的炎症機構を活性化させるという自然炎症の概念を提唱され、新たな癌転移の抑制法につながる可能性を話されました。

海外からの招待講演者にはお二人の先生をお招きしました。Charité医科大学のZuberbier先生は、特発性慢性蕁麻疹患者への対応、現在の治療ガイドライン、そして重症例に対する新たな治療としての抗IgE抗体薬開発のリーダーとして、その可能性をお話いただきました。今年には日本でも使用可能になると思われますが、難治例には福音となる薬剤と思われます。Schleswig-Holstein大学のThaçi先生にはアトピー性皮膚炎に対する治療薬としてのIL-4受容体抗体についてお話いただきました。現在、日本を含めグローバル試験が行われており、有望な成績が出されているため、数年後にはアトピー性皮膚炎治療にも分子標的薬が使用される時代が来ると考えられます。重症患者さんのQOL改善には大いに役立つと思われますが、その時代での皮膚科医の存在意義については安閑としてはられない思いも同時に感じました。

2015年度JEDCA最優秀論文賞

症例部門としては兵庫県立加古川医療センターの足立厚子先生の「再生紙トイレットペーパーに

による接触皮膚炎症候群の1例」，研究部門としては東京都立大塚病院の藤本智子先生の「原発性手掌多汗症に対する長期50%塩化アルミニウム外用剤使用の効果と副作用の検討」が選ばれ，お二人の講演がありました。足立先生は古紙パルプ再生過程で残存した顔料が原因であることを飽くなき探求から解明され，その熱意には感服する以外にありませんでした。藤本先生は手掌多汗症患者に多用されているものの十分な安全性の確認がなされていない塩化アルミニウム液について64例での検討結果を報告され，重度の副作用がなく長期使用が可能であると結論されました。臨床医にとっては貴重なデータとなるものでした。

シンポジウム

シンポジウムは4つ取り上げました。

シンポジウム1は「血管炎の診断と治療の未来像」と題し，聖マリアンナ医科大学の川上民裕先生，和歌山県立医科大学の池田高治先生，北海道大学大学院保健科学研究院病態解析学分野の石津明洋先生，杏林大学第一内科学教室 腎臓・リウマチ膠原病内科の有村義宏先生に，近日中に発行予定の日本皮膚科学会ガイドライン「血管炎・血管障害診療ガイドライン2016年改訂版」を紹介していただきながら，皮膚症状もしくは病理組織像からのアプローチ，内科サイドからのアプローチとして，血管炎における新しい知見をご教示いただきました。最後に血管炎診療における他科との連携の重要性について強調する総括を行いました。

シンポジウム2は「分子標的薬・免疫療法薬による皮膚障害対策」と題して，まずは2013年に組織化された皮膚障害対策の確立とその普及を目指した腫瘍内科医と皮膚科医を中心とするコンセンサス会議についての紹介がありました。その後，国立がん研究センター中央病院皮膚腫瘍科の山崎直也先生，静岡県立静岡がんセンターの清原祥夫先生，国立がん研究センター中央病院アピランス支援センターの野澤桂子先生に，今後ますます使用頻度が増加し，対応が重要になる分子標的薬・免疫

療法薬の皮膚障害の特徴と対策，がん患者の外見支援の意義についてご講演いただきました。

シンポジウム3は「皮膚アレルギーの発症予防」と題して，各種アレルギー疾患について予防的な観点からご講演いただきました。島根大学の千貫祐子先生には，マダニ咬傷と獣肉，カレイ魚卵，セツキシマブアレルギーの交叉反応を解明後なされている，セツキシマブによるアナフィラキシーの予知予防への取り組みを紹介いただきました。慶應義塾大学の重松由紀子先生にはハイリスク児での新生児からの保湿がアトピー性皮膚炎の発症予防に有効であること，横浜市立大学の猪又直子先生にはアレルギーマーチに対する予防としてのスキンケアによる早期介入のほか，経口摂取の早期導入など，小児アレルギー領域のトピックスを解説いただきました。埼玉県済生会川口総合病院の高山かおる先生には接触皮膚炎の予防における，交叉反応を熟知したうえでの適切な薬剤の選択，生活指導についてお話しいただきました。

シンポジウム4は「アレルギー・免疫の新しい視点からみた皮膚疾患」と題して，新たな切り口からその本質に近づきつつある疾患を取り上げました。関東中央病院の鑑慎司先生には，乾癬で一躍脚光を浴びているTh17が，カンジダに対する生体防御に重要なことをご講演いただきました。藤田保健衛生大学の杉浦一充先生には，IL-36受容体拮抗因子の遺伝子であるIL36RNの機能欠損により引き起こされる疾患をdeficiency of interleukin-36 receptor antagonist (DITRA)と呼び，尋常性乾癬を伴わない汎発性膿疱性乾癬のほか，疱疹状膿疱疹や急性汎発性発疹性膿疱症，再発性環状紅斑様乾癬の一部にもDITRAがあることを解説いただきました。東京女子医科大学微生物学免疫学の大森深雪先生にはIL-4やL-13がKRT1やKRT 10の発現を低下させること，アトピー性皮膚炎の病変部皮膚でもKRT1やKRT10の発現が低下しており，Th2サイトカインが有棘層の構造蛋白発現に影響を与えて表皮の脆弱性をもたらしている可能性をお話しいただきました。広島大学の平郡隆明先生

には、汗中のヒスタミン遊離活性物質として *Malassezia globosa* が産生する分泌蛋白である MGL_1304 が同定され、AD の病態に関与している可能性についてご講演いただきました。東北大学の山崎研志先生には酒皰の病態に自然免疫機構の過剰な反応が関わっており、酒皰の症状が自然免疫の観点から説明できることをご教示いただきました。

ハンズオンセミナー[パッチテスト実技]

教育講演、特別企画[一接触皮膚炎とパッチテストのすべて]と連動し行われたハンズオンセミナーは、東邦大学医療センター大森病院の関東裕美先生を統括者として開催されました。事前申し込み制で、若手の先生からベテランの域に達していると思われる50人以上もの先生方が参加されました。10人程度のグループに分かれて着席し、各グループには指導者が2名ずつ配置され、手厚い指導体制で進行了。各参加者に、実技セットとテキストの配布があり、実際に手を動かして実践する形式でした(図3)。日頃より疑問に思っていることについて指導者の先生に尋ねながら、



図3 ハンズオンセミナーでパッチテストの講習を受ける受講者と講師の先生方。

真剣に取り組まれている参加者の姿がみられました。さらに、レベルアップ講座として、交叉反応、成分パッチの依頼方法などについての解説があり、明日からの皮膚科診療ですぐに実践できる有意義な講習会でした。

会員懇親会

懇親会は、会長挨拶に引き続き、日本皮膚アレルギー・接触皮膚炎学会理事長の片山一朗先生、



図4 中国雑技芸術団の超人的な演技にわく懇親会場。

特別講演の坂口志文先生，招待講演のTorsten Zuberbier先生とDiamant Thaçi先生にご挨拶をいただいた後，日本皮膚科学会理事長の島田眞路先生のご発声で乾杯し，スタートしました．今回の懇親会では，歓談の時間を十分に取りましたので，皆様多くの方々と十分にお話していただけたと思います．アトラクションは中国雑技芸術団の曲芸です．目の前で演目が披露され圧巻でした．仮面が一瞬にして目にもとまらぬ速さで次々と変化する「変面」は間近でみてもどういう仕組みなのかわかりませんでした．圧巻は「椅子倒立」で，天井に届く高さまで積み上げた椅子の上で命綱無しで倒立をはじめ，さまざまなポーズを決める演技でし

た(図4)．会場の皆さんと固唾を飲んでみました．お酒も獺祭コーナーを設け，堪能していただけたと思います．お開きの時間になるまで大勢の先生方に残っていただきました．

おわりに

本学術大会を通してアレルギーの最前線に触れていただきましたことが，ご参加いただきました皆様の日常診療に寄与するのみならず，アレルギー疾患の今後ますますの病態解明につながる道標となったのであれば，これ以上の喜びはないものと思っております．